

6月に色づくアジサイフェスタ

活動地域の玄関口とも言える場所に、メンバーの1人がコツコツと挿し木で育てた3,000株程のアジサイがあり、見頃を迎える6月には毎年アジサイフェスタを開催しています。特に情報発信しなくとも、観光客による口コミやSNSなどで拡散し、予想をはるかに超える反響があり、多くのお客様で賑わいます。末松さん曰く、同時に里山保全活動を知っていただく良い機会にもなっているそうです。

掲載している写真では魅力の一部しかお伝えできないので、皆さんもぜひ行ってみたいはいかがでしょうか？



◎6月になると約3,000株ものアジサイが咲き乱れます。

活動への思い

メンバーの高齢化は時を待ってくれない。草刈や除間伐活動は、中々若い人たちの目にとまらないので、次の世代へどのように託していくのかが今後の課題となってくるということです。

「昔、地域の人たちがこの山を開墾し、あちこちで草焼きの煙がたなびいていた景色、木立の中で子供たちが走り回って虫取りをしていた情景は非常にのどかで美しかった。そんな里山を再現したい」と語る末松さん。

取材した当日は整備された箇所を散策し、実際に自生したという樹木を確認しました。一度荒廃しても、しっかり手入れをすれば再び芽吹く。そのような自然の力強さを感じることができました。かつての里山の再現に向けての今後の保全活動に胸が高まります。

県庁お知らせ掲示板

生活支援サービス提供体制の構築に向けた支援事業

～生活支援コーディネーターの養成～

高齢化の進展や独り暮らし高齢者の増加に伴い各地域で高齢者の生活支援サービスを充実させる必要があります。そのため、市町村においては、住民のニーズ把握、関係者間の情報共有、担い手の養成、サービスの運営方法の検討などを行うため、それらを担う生活支援コーディネーターを配置することとされています。

県では、このコーディネーターを養成する研修やネットワークづくりに取り組んでおり、地域の助け合いの輪が広がるよう、市町村と連携を取りながら支援を行っています。

高齢者地域包括
ケア推進課 092-643-3250

安全・安心まちづくり 団体事業補助金

～防犯活動を始める団体に補助します～

地域の皆さんが子どもの見守りなど防犯活動(既に防犯活動を行っていて、その活動を充実させる場合にも支給の対象となります場合があります)に必要な経費の一部を補助します。

▶対象の団体
自治会、PTA、ボランティア団体など

▶対象の経費
帽子、ジャンパー、のぼり旗等防犯活動用品の購入費など

▶補助金の額
1団体当たり10万円を上限

生活安全課 092-643-3124

きずな

No.14

平成31年
3月発行



【目次】

コミュニティ・スクール春日市立白水小学校(春日市)・・・	1・2
金剛山もととり保全協議会(直方市).....	3・4
県庁お知らせ掲示板.....	4

■ コミュニティ・スクール春日市立白水小学校(春日市)

学校・家庭・地域が一体となった「共育」の推進

～コミュニティ・スクール春日市立白水小学校(春日市)～

福岡県中西部の筑紫地域に位置する春日市は、自衛隊員の異動や福岡市などからの転居の関係で人口の流入が激しく、人口密度は、九州地方では沖縄県那覇市に次いで2番目に高い市です。

教育のまちとして有名な春日市ですが、以前は家庭でもできることや、地域で行った方が効果のあることの多くを学校が行っていたため、教員の負担が重く学習指導に専念できていませんでした。そこで、平成17年から平成22年にかけて、市内全ての小中学校に「コミュニティ・スクール(学校運営協議会)」が導入されました。

春日市コミュニティ・スクールの特色

春日市のコミュニティ・スクールは、大きく分けて二つの特徴があります。

一つは学校の運営や責任を学校だけで担うのではなく、地域と家庭も参画し、役割と責任を分担しながら学校運営をサポートしていく「協働・責任分担方式」をとっていることです。学校運営協議会を校長先生と対等の関係に位置づけ、言わば校長先生の良き理解者・応援団となってもらいたいという願いを込めた形としています。

もう一つは、学校運営協議会の下に「実働推進組織」を設置していることです。実働推進組織は、学校運営協議会で協議された内容を実施していくために設置されており、



取材に応じてくれた白水小学校区内にある、上白水地区自治会の兒島会長(右)と白水ヶ丘地区自治会の吉川会長(左)

学校ごとに様々な特色のある取組みが行われています。

白水小学校と地域の積極的な交流

今回は、白水小学校区内にある上白水地区自治会の児島会長と白水ヶ丘地区自治会の吉川会長にお話を伺いました。

春日市立白水小学校には、平成18年の開校と同時にコミュニティ・スクールが導入されました。小学校の子どもたちは、世代間交流事業の一環で、ニュースポーツ大会、陶芸教室、敬老祝賀会など、幅広く地域のイベントに参画しています。中でも両自治会の夏祭りでは、放送部の子どもたちが司会を務めるなど、積極的な交流が行われています。

また自治会側も学校の授業とは別に盆踊りを教えたり、子どもたちが朝元気に学校に行けるようボランティアを募って、登下校時の見守り活動をしています。ただ、あいさつをしても中々返事が返ってこないこともあるようで、児島会長は「こればかりは根気よく続けていく必要がある。いつか誰にでも元気にあいさつできるようになってもらえれば。」と今後の期待を語っていました。

仕事への憧れを育むキャリア教育

白水小学校が力を入れる取組みの一つに、6年生を対象に地域の方が自身の仕事について授業を行う「キャリア教育」があります。仕事について紹介するだけでなく、仕事に対する愛着や働くことの意義などを、子どもにもわかりやすいように説明し、仕事への憧れを育みます。消防士・建設士・薬剤師など幅広い講師が授業を行っていて、吉川会長もご自身の自衛隊での勤務のことについて授業をしたそうです。ただ子どもたちに伝えるのが難しかったようで、「来年はもっと簡単に」と次に対する意欲を示されました。



①白水小学校が力を入れる取組の一つ「キャリア教育」(自衛隊について授業をされている吉川会長)

コミュニティ・スクールでの話し合い

取材当日、学校運営協議会の様子も見学しました。メンバーは、学校関係者の他、自治会やPTA、おやじの会、幼

稚園関係者、保育園関係者、行政職員などで構成されています。

会議では、それぞれの団体の活動や行事予定などの情報共有が行われていました。今回議題としてあがっていたのが、子どもたちのいじめ・不登校についてです。学校からは、何故件数が増えているかの分析、対応策が示されるなど、現在の学校事情を共有しながら課題解決に向けた話し合いが行われていました。原因や責任を学校だけが負うのではなく、皆で幅広く支援していくことが必要といった意見があげられるなど、地域全体で問題解決しようという姿勢が印象的でした。



②学校運営協議会や見守り活動のメンバー、特色ある教育活動などを掲示しています。

今後について

今後の展望について聞いてみると、「現状維持!」と語る吉川会長。すでに多岐にわたる自治会活動を活発にされているため、今はこの活動を維持・継続していきたいとのこと。

コミュニティ・スクール導入後、子どもたちの基礎学力が向上したことに加え、それまで希薄だった「学校」と「地域」が、様々な行事を通じて良好な関係になってきたそうです。ただ悩ましいことに最近では、子ども会への加入が減っているなど、「家庭」の関心が薄れてきているそうです。「せっかく子どもたちが一生懸命がんばっているのに、もう少し地域に興味を持ってもらいたい」と話す児島会長。その言葉には子どもたちへの思いが感じられました。



③学校運営協議会の様子

かつての里山の再現を目指して

～金剛山もととり保全協議会(直方市)～



金剛山もととり保全協議会の皆さん(右端が取材に応じてくれた末松さん)

福岡県北部の遠賀川に沿って開ける筑豊平野のほぼ中央に位置する直方市。毎年4月に「のおがたチューリップフェア」を開催するなど、「花」をテーマにしたまちづくりが盛んに行われています。

今回は直方市を拠点とする「金剛山もととり保全協議会」の里地・里山の保全活動について取材しました。

協議会の成り立ち

金剛山もととり保全協議会は、直方市環境保全行動計画の重点プロジェクトとして指定された「里地・里山の保全・再生」を実施するため、平成22年に地元自治会などの地域住民により設立されました。協議会は、地元の「藤田丸の自然環境を守る会」を中心に13団体で構成されており、総勢約250名。団体ごとに里山の保全、自然環境の適正管理を行うなど、多くのお客さんが気軽に訪れることのできる里地・里山を目指し、日々活動に励んでいます。

桜や紅葉などの植樹から始まった活動は、平成25年に林野庁の交付金を受け、機械を導入しての保全活動を実施できるようになりました。作業も本格的になってくるため、協議会の中でも精鋭を集め、現在は男女合わせての20名程で活動しています。平均年齢は73歳!主に男性が保全作業を行い、女性は食事の準備などの後方支援にあたっています。

里山の再生に向けて

今回取材に応じてくれたのは協議会事務局長の末松さん。長い間放置されていた山は、人が入ることが出来ないほど荒廃していたとのこと。

特に竹林が密集すると、日光が遮られるため、他の樹木の成長に影響を及ぼし、植生が乱れてしまいます。動物の餌となる木の実なども育たないため、イノシシなどの動物が山を下りて近隣の畑を荒らすなどの被害も発生します。

そこで、「まず太陽の光を山に取り入れる」ことを第1の

目標として作業に入りました。竹を少しずつ切り開き、日光を地面にまで行き届かせる、そうすることで動物の餌となる草や樹木の自生を図ります。ただ竹は非常に密集して生えており、また耕作跡地となった場所にはつる植物が育ちやすく、竹木にも絡んでいたため、伐採作業の妨げになり、大変苦労したとのこと。



①荒廃している竹林。手を入れないと、日光が差し込まないほど所狭しと生えています。

保全作業の効果

伐採した樹木や竹は、広葉樹を木炭・薪として活用・販売、竹などは粉碎してチップにして散策道に敷設するなど、森林資源を有効活用しています。

“とにかく原状復帰”と活動を始めてから3年程で、ほぼ全ての区域に手が行き届き、太陽の光を取り込むことができました。その甲斐もあり、動物の餌となる植物が自生したことにより農家での獣害が減少、また準絶滅危惧のトノサマガエルが確認されるなど、末松さんは「山が息を吹き返してきている」と手ごたえを感じています。今後もさらに植樹や植ええなどを行っていき、風水害に強く、自生した森作りに取組んでいくとのこと。



②伐採した竹は、粉碎機にかけチップにし、散策道に敷設するなど、森林資源を有効活用。